

大芸た

第5回

1941~1950年

湖

北省の山稜に、一発の銃声が響いた。狙撃の弾は最後尾を歩いていた若い見習士官の側頭部をつちぬいた。久保克彦、二四歳。美校工芸科図案部卒業。一九四四年（昭和十九年）七月十八日、彼が大陸に転属となつてわずか三ヵ月、三度目の交戦のときだった。

太平洋戦争が始まつた一九四一年十二月、修業年限を三ヵ月短縮した卒業式が行われた。翌四二年九月にはさらに六ヵ月を短縮した卒業式が行われる。久保は、その時の卒業生の一人だった。卒業と同時に即召集、彼らには一〇日後の入営が待っていた。いま教室にならんでいる学生さんたちと同じ顔の若者たちが、戦争へとかり出されていったのだ。いまの就職難とも、あまりに意味が違う。他国まで行って、なぜ他国の人を殺すのか。なぜ人は殺しあつたのか。そしてなぜ自分は死ななければならぬのか……。敵機が火をふいて落ちていく彼の卒業制作には、背後に人力飛行機やヨット、鶴、昆虫、輸送船、スクリーなど、こちゃまぜにシニールに描かれている。おろかな文明、人間。進歩の果ての破滅。彼が描いたのは、ささやかな抵抗か、それとも諦観か。



習志野での教練（前列中央が久保。久保克彦遺作画集『より』）



無言館（窪島誠一郎『無言館ノオト』集英社新書 2001年より）



美校石膏室の久保（遺作画集より）

東京美術学校1944年

戦争

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『日本美術 誕生 - 近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術 - 美の政治学』

それは酷だと、美術への断ちきれぬ思いをつづる。そして大陸出発直前の手紙では、ふと見た姉の日記の「生き抜いて、七度生まれ替わって絵を描いて呉れ」という一言に「枯れていた誓の涙」があふれ出たと告白する。物静かな性格の彼は、戦地では口数少なく、ときどき手帳に風景をスケッチしていた。上官を「殿」づけでよぶ軍隊のなかで、年配の補充兵は、彼を「見習士官さん」と慕ったという。（久保克彦遺作画集『二〇二二年』。美校卒業生の戦没者は、わかっただけで一六七名という。長野県上田市に、戦没画学生の遺品を集めた美術館「無言館」がある。作品は、幼なく未熟なものもある。それがなおさら、彼らの若くして断たれた思いを強くする。来館者は年配の人が多かった。画学生の兄弟姉妹に近い世代の人たちだろう。すすり泣きの聞こえる美術館を、私も初めて見た。でも世代をこえて、彼らの青春は、見る人の心といまを、鋭く問いえへる。

戦時中の美校は、それでも自由を伝えていた。不条理になり、なぐりつける軍事教練の教官に、学生はときおりキレた。教官をなぐり返し、刀を抜いた教官に追い回されたり、逆に刀を奪いとって追い回したり。軽い処分ですんだのが不思議なくらいの逸話が残る。また友の出征を見送る上野駅で、裸踊りをして憲兵に追いかけられ、上野駅への美校生の立ち入りが禁止されたり。乱暴だが、どういふ顔をして友を送つたらいのかかわらなかつた。彼らの不器用なナイーブさが伝わる。「非国民、ストレスの無軌道ぶり。でもそれが、自由や平和を望み、戦争や人を殺すのはイヤだという、不器用な意志表示なら、むしろそうあってほしいとても貴重なもの」に思える。国民である前に人間であり、そのための美術であるなら、この戦時期とその人々を、忘れてはならないだろう。

（さとう・どうしん／美術学部芸術学科助教授）



久保克彦 「正午あるいは真夏」145.0×234.5cm
（卒業制作「図案対象」5点中の中央画面）1942年 東京芸術大学大学美術館蔵

タイムカプセルに乗っ

東京音楽学校1949年

音校から 芸大音楽学部へ

瀧井敬子

音楽学（ドイツ・ロマン派、および日本洋楽草創期の研究）、主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点 - 音楽におけるジャポニスムの一断面」「森鷗外とオペラ」



矢代秋雄作曲《ピアノ三重奏曲》スケッチ 日本近代音楽館蔵



一九四九年（昭和二十四年）は、音楽取調掛設置から起算して東京音楽学校の創立七〇年にあたり、それは音楽教育創始七〇年ということでも、記念式典と演奏会が一年早く、一九四八年秋に行われた。「七〇」という数字は節目としてはいくらか中途半端に思われるが、学校側には区切りをつけた大きな理由があった。学校制度の改革により、一九四九年五月になると音楽学校は美術学校と合併して、東京芸術大学に昇格することがすでに決定されていたからである。音楽学校の最後の校長は夏目漱石の高弟、小宮豊隆であった。彼は技術優先の音楽家が生まれること、つまり「内部を欠いた外部」がはびこることを恐れ、この学制改革を奇貨として「一般教養」によってバランスをとるべきだと主張した。しかし歴史のサイクルは一巡りして、近年、戦後の「一般教養」体制は大学の重点化と共に崩壊した。作曲

家の矢代秋雄は四〇年前、学生たちを早くもこう論じていた。「音楽家も、よき社会人であるためには、音楽以外の教養をもつべきであると言いつて、ショウタン言っちゃいけない。これはセンゼン話が逆である。私なら、よき社会人になるためには、まず、よき音楽家になりなさいと言いたいところである。（中略）毎日、毎日、コソコソと時計屋みたいの仕事をしなきゃ」。矢代は大好きな時計職人の喩えを持ち出して、付け焼き刃の「サア、教養つけましょ」主義を軽蔑した。

一九四九年二月に行われた音楽学校最後の卒業演奏会は、歴史の節目として意義深い。戦後の作曲界をリードした矢代秋雄と黛敏郎がこの年に卒業、それぞれ作品を発表している。もちろん、この頃学窓を巣立つ活躍を始めた作曲家は彼らだけではないが、二人の発表は明治から日本洋楽界の中心となってきた音楽学校の未来を暗示するような出来事だった。

矢代は《ピアノ三重奏曲》、黛は《十の独奏楽器のためのディヴェルティメント》を、どちらも作曲家自身がピアノリストとして参加しながら発表した。作曲家の石

桁真礼生は当時まだ学生だったが、二人の先輩の作品から鮮烈な印象を受けた。のちに石桁は矢代にこう語っている。「黛作品は『かぼちゃ畑に鯛が跳ねる』なら、君の作品は『かぼちゃ畑にかぼちゃがごっこする』だよ」と。黛のジャズ風の奇抜な曲に対し、矢代のアカデミズム本流の書法を言い得て妙である。

ところで、批評家の山根銀二によると、この少し前から音楽学校の卒業演奏会には多くの聴衆が押し掛けるようになっていた。この年も、六時間かかる演奏会の立ち見を辞さぬ人々で、立錫の余地もないありさまだった。重要な音楽関係者のほとんどすべてが来ていたという。終戦直後、岩波書店から出される難しい哲学の本などが飛ぶように売れたのと同じく、戦争で遮断されていた洋楽に接する機会を求めて、いわば飢えを満たすように人々はやって来たのである。

焼土から再建しつつあった戦後日本にとって、音楽学校の卒業演奏会は、文化的空白を埋める一からの出発点であった。

（たきい・けいこ演奏芸術センター助手）



同作品の自筆スコア
日本近代音楽館蔵。
なお、卒業演奏会における写真は、『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第二巻』797頁に掲載されている。



黛敏郎の卒業作品は1950年に日比谷公会堂で再演された。フルート：森正、オーガエ：鈴木清三、クラリネット：北爪利世、ファゴット：中田一次、トランペット：中山富士雄、コントラバス：窪田基の以上6氏は、卒業演奏会のときと同じメンバーだった。写真提供 故中山富士雄氏夫人/中山洋子氏